

日本語における否定表現の諸相に関する総合的研究



<https://doi.org/10.24412/2181-1784-2026-21-185-191>

*Tursunova Nilufar Talatovna*  
Senior lecturer of High School  
Tashkent State University of Oriental Studies  
[lilytt1986@gmail.com](mailto:lilytt1986@gmail.com)

**要旨**：本研究は、日本語における否定表現の多面的特徴を明らかにすることを目的とする。日本語の否定は、単なる文法的形式にとどまらず、話者の認識、期待、そして談話の流れと密接に関係する複雑な言語現象である。本研究では、記述的分析、意味分析、談話分析の手法を用いて、否定の構造と機能を総合的に検討した。特に、文法的否定（ない・ぬ・ず）、語彙的否定（不・無・非・未）、および否定応答詞（いいえ・いや）に注目し、それぞれの役割を分析した。その結果、日本語の否定は認知的・語用論的の性質を持ち、多層的な構造を形成していることが明らかとなった。また、否定は単なる否認ではなく、評価や判断を表現する重要な手段であることが示された。

**キーワード**：日本語、否定表現、認知言語学、語用論、語彙的否定、談話分析

*Abstract* : This study aims to clarify the multifaceted nature of negation in the Japanese language. Negation in Japanese is not merely a grammatical form but a complex linguistic phenomenon closely related to the speaker's cognition, expectations, and discourse context. The research employs descriptive, semantic, and discourse analysis to examine the structure and functions of negation. Special attention is given to grammatical negation forms (nai, nu, zu), lexical negation through prefixes (fu-, mu-, hi-, mi-), and negative response expressions such as iie and iya. The findings reveal that negation in Japanese possesses cognitive and pragmatic characteristics and forms a multilayered system. Furthermore, negation functions not only as denial but also as a means of expressing evaluation and judgment in communication.

### はじめに

否定は、あらゆる言語において基本的かつ不可欠な文法カテゴリーの一つであり、事実・状態・行為の不在や否認を表す機能を担っている。しかし、日本語における否定表現は単なる文法的形式にとどまらず、話者の認知、期待、そして談話の流れと密接に関係する複雑な言語現象として位置づけられる。提供資料に見られるように、日本語の否定は「話題の流れ」と「話者の内的予測」の相互作用の中で生成される。すなわち、日本語における否定は客観的現実を直接的に否定するの

ではなく、話者が事前に持っている期待や認識とのズレを表現する機能を持つ。この点は、日本語の否定を理解する上で極めて重要である。

例えば、実際には人が存在する状況であっても、「誰もいない」と発話される場合がある。このような表現は、現実の否定ではなく、話者の認識や注意の焦点に基づく主観的判断を反映している。このような現象は、日本語の否定が認知的・語用論的性質を持つことを示唆している。さらに、日本語の否定は多様な形式によって実現される。文法的否定（ない・ぬ・ず）に加え、語彙的否定（不・無・非・未など）、否定応答詞（いいえ・いや）などが存在し、それぞれ異なる機能を担う [Morita 1995:258]。このような多層的構造は、日本語の否定体系の大きな特徴である。

本研究の目的は、日本語における否定表現の諸相を体系的に分析し、その語彙的・文法的・語用論的特徴を明らかにすることである。

## 研究方法

本研究では、日本語の否定表現を総合的に分析するために、複数の言語学的手法を用いた。まず、記述的分析により、日本語の否定表現の形式的分類を行った。具体的には、提供資料に基づき、「否定の姿」「意味面」「形式」という三つの観点から整理した。「否定の姿」に関する分析では、否定がどのような状況や認知過程において生起するのかに注目した。日本語の否定は、単に客観的事実を否認するのではなく、話者の期待や前提と現実との乖離から生じることが多い。そのため、否定は談話の流れや文脈に依存して現れる認知的・語用論的現象として位置づけられる。この観点では、否定の発話がどのような前提や状況に基づいて成立するのかを具体例に基づいて検討した。

第二に、「意味面」における分析では、否定が担う意味的機能を明らかにした。特に、対極語（例：生／死）や負極語といった語彙的対立関係に注目し、否定がどのように意味の対立や評価を形成するかを検討した。また、否定は単なる「不在」を表すだけでなく、程度の否定、評価的否定、感情的否定など、多様な意味的ニュアンスを持つことが確認された。まず、対極語に関する分析では、「生／死」「存在／不在」などの二項対立的な意味関係に注目した。これらの語は単なる反対語ではなく、意味的に相互排他的な関係にあり、一方の概念が成立することで他方が否定される構造を持つ。例えば、「彼はまだ生きている」という文は、「死んでいない」という否定的意味を内包している。このように、対極語は肯定的表現の中にも潜在的な否定を含む点で特徴的である。

さらに、「死」という語は単に「生」の反対ではなく、「生の不在」として意味づけられる場合が多い。このことから、否定は独立した意味ではなく、肯定的概念との関係性の中で理解されるべきであるといえる。このような意味構造は、言語における評価や価値判断とも密接に関係している。

次に、負極語（negative polarity items）に関する分析を行った。負極語とは、主に否定文脈において使用される語彙であり、日本語では「誰も」「何も」「どこも」などがこれに該当する。

例：

- ・誰も来なかった
- ・何も分からない
- ・どこにも行かなかった

これらの語は、単独では肯定文で使用されにくく、否定形式（～ない）と共起することで初めて自然な文となる。このことから、負極語は文の意味構造において否定と強く結びついた要素であるといえる。

また、負極語は単に情報を否定するだけでなく、「完全否定」や「強調的否定」の機能も持つ。例えば、「何も知らない」という表現は、単に知識が少ないことを示すのではなく、「全く知らない」という強い否定を表す。このように、負極語は否定の程度や強度を調整する役割を果たしている。

さらに、日本語では「全然」「決して」「少しも」などの副詞も否定文と共に用いられ、意味的強化を行う。

例：

- ・全然分からない（全く理解できない）
- ・決して許さない（絶対に許さない）
- ・少しも疲れていない（全く疲れていない）

これらの表現は、否定の意味を単なる否認から強調的・感情的なレベルへと拡張する機能を持つ。

以上の分析から、日本語における否定は、単なる文法的否定ではなく、語彙レベルにおいても多様な意味機能を持ち、意味的対立、強調、評価などを含む複雑な体系を形成していることが明らかとなった。

第三に、「形式」の観点から、日本語における否定表現の多様な手段を体系的に分類し、それぞれの機能的特徴と使用条件を明らかにした。本研究では、主に①文法的否定、②語彙的否定（接頭辞）、③談話レベルの否定（応答詞）の三つに分類して分析を行った。まず、文法的否定に関しては、「ない」「ぬ」「ず」などの否定形式が中心となる。これらは主に動詞や形容詞に付加され、命題全体を否定する機能を持つ。

例：

- ・行く → 行かない（行為の否定）
- ・面白い → 面白くない（性質の否定）
- ・知る → 知らぬ／知らず（古風・文語的否定）

このように、文法的否定は最も基本的かつ体系的な否定形式であり、文の述語に直接作用することで、命題レベルの否定を実現する。一方で、「ぬ」「ず」などは文体的制約を受け、主に書き言葉や慣用表現に限定されるなど、使用条件に違いが見られる。

次に、語彙的否定としての漢語接頭辞（不・無・非・未）について分析した。これらは単語レベルで否定的意味を付与するものであり、文法的否定とは異なり、語の意味そのものを変化させる機能を持つ。

例：

- ・可能 → 不可能（一般的否定）
- ・意味 → 無意味（完全な不在）
- ・公開 → 非公開（規範的否定）
- ・完成 → 未完成（未実現）

これらの接頭辞はそれぞれ異なる意味的ニュアンスを持ち、「不」は一般的否定、「無」は存在の完全否定、「未」は時間的未達成、「非」は規範や基準からの逸脱を表す。このように、語彙的否定は意味の精密な区別を可能にし、日本語の否定体系の細分化された構造を支えている。

さらに、談話レベルの否定として、否定応答詞（いいえ、いや、ううん）について考察した。これらは文の内部構造ではなく、会話の流れの中で機能する否定形式である。

例：

- A：来ますか。  
B：いいえ、行きません。  
A：本当ですか。  
B：いや、それは違います。

これらの応答詞は、相手の発話内容や前提を否定する役割を持ち、文法的否定とは異なるレベルで機能する。特に日本語では、否定応答詞と文の否定形式（～ない）が形態的に一致しない点が特徴的であり、これは英語（no / not）などとは対照的である。以上の分析から、日本語の否定表現は、文法・語彙・談話という複数のレベルにまたがって存在し、それぞれ異なる機能と役割を持つことが明らかとなった。すなわち、日本語の否定は単一の体系ではなく、多層的かつ相互補完的な構造を有する複雑な言語現象であるといえる。

以上の三つの観点を統合的に分析することにより、日本語における否定表現の全体像を包括的に把握することが可能となった。さらに、談話分析の手法を用いて、否定がどのように文脈の中で機能するかを考察した。日本語における否定は、単文レベルではなく、談話レベルにおいて成立することが多いためである [Sawada 2021:15-25]。加えて、語用論的分析により、否定が話者の意図や評

価、感情をどのように反映するかを検討した。特に、「全然～ない」などの表現に見られる評価的機能に注目した[Sawada 2021: 85–95]。

## 結果

### 1. 否定の認知的基盤

分析の結果、日本語の否定は高度な認知活動に基づく言語現象であることが明らかになった。否定は単なる論理的操作ではなく、話者の前提知識や状況認識に依存して成立する。例えば、「吾輩は猫ではない」という表現は、特定の文脈が存在して初めて自然な発話となる。このことは、否定が文脈依存的であることを示している。

### 2. 期待と否定の相互関係

日本語の否定は、話者の期待とのズレによって生じる傾向が強い。

例：「全然冷えていない」→ 本来は冷えているはずという前提

このように、日本語の否定は「期待の否定」として機能する。

### 3. 語彙的否定の体系

語彙レベルでは、否定は以下のように分類される：対極語（生／死）、負極語、差別語的語彙

これらは意味的対立に基づく否定であり、単なる文法的否定とは異なる機能を持つ。

### 4. 接頭辞による否定の意味差

不：一般否定（不可能）

無：完全不在（無意味）

未：未実現（未完成）

非：規範逸脱（非公開）

この分類は、日本語における否定の精密さを示している [2]。

### 5. 否定応答の談話機能

「いいえ」「いや」「うん」などは、文法的否定とは異なり、談話レベルで機能する。

### 6. 「ない」の多機能性

「ない」は：助動詞（行かない）、形容詞（面白くない）、慣用表現として機能する。さらに、「雨の降らないうちに」のように、形式と意味が一致しない場合も存在する。

## 考察

本研究の結果は、日本語の否定が単なる文法カテゴリーではないことを明確に示している。

第一に、日本語の否定は「認識の否定」として機能する点が重要である。すなわち、日本語における否定は客観的事実そのものを直接的に否定するのではなく、話者の認識や判断、さらには期待との不一致を表す機能を持つ。この特徴は認知言語学の観点から極めて重要であり、言語が単なる情報伝達手段ではなく、話者の内的世界を反映するものであることを示している。例えば、「誰もいない」という発話は、実際には人が存在する状況でも、話者の注意や認識の範囲に基づいて使用される場合がある。このように、日本語の否定は「現実の否定」ではなく、「認識の枠組みにおける否定」として理解されるべきである。

第二に、日本語の否定は談話依存性が高く、文脈なしでは成立しにくいという特徴を持つ。多くの場合、否定表現は先行する発話や状況的前提を必要とし、それらとの関係の中で意味を持つ。例えば、「全然分からない」という表現は、「分かるはずだ」という前提や期待が存在して初めて自然な発話となる。このように、日本語の否定は単独の文として完結するのではなく、談話の流れや文脈的背景と密接に結びついて機能する。この点は、日本語の否定を分析する際に、文レベルだけでなく談話レベルの視点が不可欠であることを示している。

第三に、語彙的否定の多様性は、日本語の意味体系の精緻さを示す重要な要素である。日本語では、不・無・非・未といった接頭辞を用いることで、否定の種類や程度、性質を細かく区別することが可能である。例えば、「不可能」は一般的な否定、「無意味」は存在の完全な欠如、「未完成」は時間的な未達成、「非公開」は社会的・制度的基準からの逸脱を表す。このように、語彙レベルでの否定は単なる否認ではなく、意味的ニュアンスを伴った精密な分類体系を形成している。このことは、日本語が意味の微細な差異を表現する能力に優れていることを示している。

第四に、「ない」の多機能性は、日本語の否定における形式と意味の乖離という重要な特徴を示している。「ない」は動詞の否定（行かない）、形容詞的用法（面白くない）に加え、慣用表現や文脈依存的表現においても用いられる。さらに、「雨の降らないうちに帰る」のように、形式上は否定であっても、意味的には否定を表していない場合も存在する。このような現象は、日本語において否定が単なる形式的操作ではなく、語用論的・慣用的要素と結びついた柔軟な表現手段であることを示している。

これらの点から、日本語の否定は認知・談話・語彙・形式の各側面において多層的な特徴を持ち、単純な文法カテゴリーとしては捉えきれない複雑な言語現象であるといえる。

## 結論

本研究では、日本語における否定表現の多面的な特徴について総合的に分析を行い、その体系的性質を明らかにした。その結果、日本語の否定は単なる文法的操作にとどまらず、認知的現

象、語用論的現象、そして多層的構造を有する複雑な言語体系であることが確認された。特に、日本語の否定は話者の主観的認識や期待と密接に結びついており、客観的事実の単純な否認ではなく、評価や判断を反映する表現手段として機能することが明らかとなった。このことは、日本語における否定が情報の伝達だけでなく、話者の内的態度や認知的枠組みを表現する重要な役割を担っていることを示している。

さらに、日本語の否定は文法的形式（ない・ぬ・ず）、語彙的手段（接頭辞など）、および談話レベルの表現（否定応答詞）といった複数のレベルにまたがって実現され、それぞれが相互に補完し合うことで全体としての意味構造を形成している。このような多層的構造は、日本語の否定体系の柔軟性と精緻さを示すものである。

以上の考察から、日本語の否定表現は単一の視点からでは十分に説明できない統合的な言語現象であり、その理解には認知言語学、語用論、意味論など複数の理論的枠組みを組み合わせた分析が必要であると結論づけられる。

今後の課題としては、日本語における二重否定の機能的分析や、肯定文における否定的意味の表現、さらに日本語教育における否定表現の習得過程の解明などが挙げられる。これらの研究は、日本語の否定体系のさらなる理解に寄与するものと期待される。

#### 参考文献

1. Kubo, T. (2017). *The Structure of Negation in Modern Japanese*. Tokyo: ALC Publishing.
2. Liu, S., & Allen, M. (2014). Lexical Negation and its Semantic Functions in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics*, 23(2), 115–140. Springer.
3. Morita, Y. (1995). *文法の発想 (Bunpō no hassō)*. Tokyo: 明治書院 (Meiji Shoin).
4. Khalmurzaeva, N. T. "CONTRAST DESCRIPTION OF JAPANESE AND CHINESE VERBAL COMMUNICATIVE BEHAVIOR." *CURRENT RESEARCH JOURNAL OF PHILOLOGICAL SCIENCES (2767-3758)* 2.12 (2021): 170-176.
5. Sawada, O. (2021). *Pragmatics of Negative Expressions in Japanese*. Oxford: Oxford University Press.
6. Tsujimura, N. (2013). *An Introduction to Japanese Linguistics (3rd ed.)*. Oxford: Wiley-Blackwell.
7. KHALMURZAEVA, Nadira. "日本語におけるコミュニケーション・バリア: 敬語表現と人間関係."